

Y6-16

がん患者の想いの実現に向けた地域医療福祉チームを協働させる看護力

松山赤十字病院 地域医療連携課

高田^{たかだ}めぐみ、三好真由子、得能 裕子、
友澤 永子、渡邊八重子

当院は、地域医療支援病院、地域がん診療拠点病院として急性期医療を担当している。入院患者の20%、また外来患者の16%は、がん患者で、手術・化学療法、放射線療法を実施し急性期医療を終了する。

患者は、急性期治療の終了後も、死への恐怖、家族への想い、がんの進行や症状の増強による苦痛・苦悶等、図りきれない身体的・精神的さらに社会的問題を抱えることになる。患者は何を望み、最期までどう生きていきたいのか。家族は何を望み、どのような生活を望み、実現できるのか。消化器科領域の療養支援ナースとして、患者・家族の尊厳（その人らしくいきいき生きる）を目指し、療養支援を模索・実践している。

がん患者と家族は「自分らしく生き・生ききる場」として、ホスピス・療養型病床への転院、在宅での療養、さらに当院での見取りを選択する。終末期がん患者の療養場所の選択を支援することは、患者・家族が希望する場所に込めた意味を理解することから始まる。些細な情報もアセスメントし、患者・家族が求めていることを的確にとらえ、最善であると考えられる方策を提示し、それを保障することが重要である。

療養支援ナースとして、終末期がん患者と、その家族の想いを押し量る看護力と、その想いの実現に向け地域医療福祉チームを協働させる看護力の必要性を確認したので報告する。

Y6-17

HIVケア多職種チームの構築について 地域との連携に向けて

武蔵野赤十字病院 医療連携センター¹⁾、
筑波メディカルセンター病院²⁾

横見^{よこみ}弥世衣^{やよい}¹⁾、本郷 偉元¹⁾、中村 春香¹⁾、
杉田 秀文¹⁾、松崎 信也¹⁾、斉藤 恭子¹⁾、
空代 馨香¹⁾、石田 信哉²⁾、城尾 律子¹⁾

当院が位置する北多摩南部医療圏内においてHIVにおける医療提供体制を整備するだけではなく、地域のなかで継続した治療が行えるよう、行政を含めた保健・福祉分野の協働が必要とされてきた。HIV診療拠点病院として外来患者数の増加への対応、入院治療はもちろんのこと退院後の在宅移行への支援体制が急務とされてきた。2009.12「HIV診療に関する検討会」が当院スタッフの間で行われ診療体制に対する課題が多く出された。多職種・他分野との地域連携も必須とされ、まず院内の体制づくりからスタートさせることとなった。院内において横断的なチーム作りを進めるにあたり、メンバーとしては医師・看護師・薬剤師・事務担当・SWと多職種が参加し「診療の継続」「患者支援の体制づくり」について検討をはじめた。検討内容は初診時の対応から、受診の継続、福祉サービスの導入、文書管理などであり、様々な点から提案、実施を進めてきた。現在「HIVケア多職種カンファレンス」と名称を変更しカンファレンスを開催している。地域連携においても診療を含めた外来受診の継続はもちろんのこと、入院から退院に至るまでの支援を行っている。今後拠点病院のみならず、往診・訪問看護の導入など社会資源に働きかける活動をおこない、行政を含め地域との協働を行い在宅生活の支援をすすめたい。